

逆行した元悪役令嬢、

性格の悪さは直さず

処刑エンド回避

します！



Character

～ありしのニヤ～

ユリアン
(ユリアン・ダ・ストラティス)

ルヴァランチア王国の第二王子、
アリスティーナの婚約者。
無表情で考えの読めない
美青年。

アリス
(アリスティーナ・クアトラ)

人生やり直し中の元悪役令嬢。
良い子になるべく奮闘中。
ユリアンとは婚約破棄を
望んでいる。



マッテオ
(マッテオ・ダ・ストラティス)

国の第一王子、
ユリアンの兄。
優秀な弟に事あるごとに
嫌味を言う。

チャイ・スロフォン

スロフォン王国第四王女。
可憐で優しい《妖精王女》と
呼ばれている人気者。

サナ・モラトリム

学園に通う
アリスティーナの取り巻き筆頭。
取り入れるために必死
だったが……。

ウォル・ターナトラー

苛められているところを
アリスティーナに助けられて
以来、彼女に懐いている
学園の先輩。

逆行した元悪役令嬢、 性格の悪さは直さず 処刑エンド回避します！

1

プロローグ	006
第一章 傲慢令嬢、アリスティーナ・クアトラ	012
第二章 それは幸か不幸か	024
第三章 それぞれが育った場所	081
第四章 悪い子に逆戻り……？	119
第五章 アリスティーナ、いざ学園へ	163
第六章 運命の妖精、遂に現る	215
第七章 それぞれの決意	244
番外編 二人はアリスが大好きです！	262
番外編 幼き日の大切な約束	285

プロローグ



暗い監獄。ぽちゃん、ぽちゃんはどこからか水が漏れる音と、かさこそねずみが駆け回る音だけがする場所に、近づいてくる甲冑姿の男たち。あの中にはきつと、私の死刑を執行する処刑人もいるに違いない。

「嫌ああつ！ 来ないでえええつ!!」

私は叫びながら、ガバツと勢い良くベッドから飛び起きた。はあはあと肩で荒い呼吸を繰り返しながら、キヨロキヨロと辺りを見回す。その反動で、こめかみからぼたりと汗が流れ落ちた。

「ここは……夢？」

辺りはまだ暗く、目が慣れるまでに少し時間がかかった。その内に、ここが自室であると気付く。夢、にしては感じる心音あまりにも生々し過ぎる。部屋に響く自分の荒い呼吸の音も、肌に触れているシーツの感触も、こんなにはつきりとしているのだ。

「だけど確かに、私はあそこで死んだはず……」

そう。十七の誕生日を迎える前に、私の人生は幕を閉じたのだ。生気を感じないあの冷たく暗い監獄で、たった一人孤独に死んだ。

いや、一人ではなかったか。あの場には、私の死刑を執行する処刑人もいたわ。実際にはきつと、証人として監視窓から様子を覗のぞいていた者もいたのでしょうね。

でも本当に、それだけ。あんなにも持てはやされ、人に囲まれ、家族にも愛されていたはずの私が、なんて憐れな死に方だろう。

「こわ、かった……こわかったよ……お……っ」

段々と記憶が戻ってきた私の瞳から、ぼろぼろと涙が溢あふれ出す。あの時の凍えるような寒さ、たった一人の孤独、迫り来る死の恐怖。それらを思い出し、ガタガタと体が震えた。

確かに私は死んだ。じゃあここは、天国なの？ 天国ならどうして、こんなにも鮮明に死の恐怖を感じなければならないの？ 一体私が何をしたっていうのよ。

「いや、嫌、もう嫌よお……っ」

あの女も、婚約者の王子も、私を裏切った令嬢達も家族もなにもかも、恨む心の余裕すら今の私にはない。ただただ、恐怖に慄おのき叫ぶごとしかできない。

「アリスティーナお嬢様！ どうされたのですか！」

その時、勢い良く部屋のドアが開かれたと同時に、使用人や衛兵数名が足音を響かせながら入ってきた。

「ご無事ですかお嬢様！」

たたと一番に私の元へ駆け寄ってきたメイドの姿を見て、驚きに目を見開く。それはかつて私

が若い頃に解雇した、乳母であり侍女でもあるリリだったからだ。

リリがここに居るなんて、やっぱりこれは現実ではないの？ 益々混乱し、涙を流す私を見ていた彼女が、焦ったように私を抱き締める。

「まさか侵入者ですか？ なにかされたのですか？」

「あ……あ……っ」

「もう大丈夫ですから、どうか落ち着いてくださいお嬢様。リリがお側におります」

どうやら私の叫びをそう解釈したらしいリリは、衛兵達に屋敷中を搜索するよう指示を出す。違うと言いたくても言葉が出てこず、私はただ幼い子供のように涙を流すだけだった。

リリは柔らかな表情でこちらを見つめると、両手でそっと私の手を包み込んだ。

「まあ、小さなおててがこんなに冷えて……よほど怖い思いをされたのですね、お可哀想に」

「……え？」

『小さなおてて』そう言われて初めて、私は自身の掌てのひらをじっと見つめる。

どう見ても、十七を目前にした女のそれではない。リリの手の中に簡単に収まってしまふほどの、小さな小さな子供の手だ。

「……っ！」

それに気付いた瞬間、私はリリの手をふりほどき転がるようにベッドから降りると、部屋にある姿見まで駆ける。メイド達が手にしているランプに照らされ、鏡の中の私の姿がぼうっと映し出さ



れた。

「これは……」

私、子供だわ。人は本当に混乱すると、たちまち語彙力が消滅してしまうらしい。私は放心状態で鏡を見つめ、ただ口の中でぶつぶつと「子供、子供だわ、子供なんだわ……」と繰り返していた。

「お嬢様、急にどうなされたのですか！」

たちまちリリが駆け寄り、私の体を支える。そうすると、私と彼女の体格差が浮き彫りになった。

「リリ……私は今、いくつかしら」

「はい？」

「だから私は、何歳なの？」

唐突な質問に驚いた様子で、リリは答える。

「お嬢様は、先日五つになられたばかりではないですか」と。その瞬間、私は膝からがっくりと崩れ落ちた。

ああ、これはやっぱり冥界めいかいで見ている夢なんだわ。だってそうでなければ、あり得ない。十六の自分が、まさか時を遡さかのぼっているなんて。

「さあ、アリスティーナお嬢様。目を瞑つぶって、ゆっくりと呼吸をしてください。今度はきつと、幸せな夢が見られますからね」

とんとん、とんとんと、リリが私の腹の辺りを優しく撫でる。それはまるで魔法のように、私の小さな体から力を奪っていった。視界が暗くなり、頭がぼうつとする。これが眠りにつく瞬間なのかと思しながら、体がベッドに沈んでいくことに抗えない。

アリスティーナ・クアトラという存在がこの世に生まれ、物心ついてから首元に鎌を突きつけられるまでの出来事が、まるで精緻な絵を見ているかのようになり、ゆっくりと目の前を流れていく。眠りについていくような、過去の記憶を回想しているような、不思議な感覚。

ふと気が付くと、私の足元に一人の令嬢がうずくまっている。そう、これは夢。私にとっての、悪夢なのだ。

第一章 傲慢令嬢、アリスティーナ・クアトラ



「子爵令嬢ごときが、誰に向かって口を開いているのかお分かりなのかしら」

私、アリスティーナ・クアトラ公爵令嬢といえ、この王立学園でその名を知らない者は居ない。生家は王家の側近として代々仕えている由緒正しい公爵家であり、優秀な兄が三人。末娘として生まれた私は、両親や兄達からこれでもかというほどでろでろに甘やかされてきたものだから、自分こそがこの世のヒロインであると信じて疑わなかった。

生まれながらの美しい顔、すらりと長い手足。自慢の長い琥珀色の髪を靡かせながら、大勢の取り巻きを従え学園内を闊歩する。

完璧な私には、欠点なんて一つもありません。ずっとそう信じて、疑ったことなどなかった。「さあ、拾いなさい。みっともなく頭を垂れて、地面に這いつくばって拾うのよ！」

十三でこの学園に入学し現在三年と少し、私はすっかりこの狭い社会を牛耳る女王として君臨している。

「どうかお許しください、クアトラ様……っ」

「いいえ、許さないわ。貴女は私の婚約者であるユリアン様に、分不相応にも色目を使ったのよ！」

数人の取り卷きを従え、たった一人の令嬢を苛める。この時の私は、裏で自分が「悪役令嬢」などという不本意な名で呼ばれていたなんて、知る由もなかった。

「教えを乞うフリをして近づくなんて、なんて浅ましいのかしら」

「違います！ 教室に残って勉強をしていた私に、ストラテイス殿下がアドバイスを下さっただけです！ 信じてください、クアトラ様！」

全身泥だらけになりながら、その子爵令嬢は許してくれと懇願する。

ああ、なんてみつともないのかしら。私には考えられないほどに無様だわ。

子爵令嬢に生まれたのならば、立場を弁えて行動すればいいものを。図々しく人の婚約者に手を出すから、こういうことになるのよ。散らばった教科書や羊皮紙を必死に拾い集めている彼女の手を、私はローファーの爪先で軽く蹴った。

「い、痛い……っ！」

「私の心の痛みはこんなものではなくってよ！ ほら、拾いなさい早く！」

高笑いする私を見て、流石の取り卷き達もたじろいでいる様子だ。ふん、この程度で情けない。

たかが子爵令嬢一人どうこうしたところで、私になんのお咎めもないのは分かりきったことなんだから。

ジロリと背後に視線を向けた私を見て、取り卷き達の体もビクリと震えた。逆らえば、明日あそこで泥に塗れているのは自分。それだけのごめんだと、誰もが私の肩を持つ。



「アリスティーナ様からストラティス殿下を奪おうだなんて、身の程知らずもいいところね！」

「そうよ！ 美貌も家柄も完璧なアリスティーナ様に、貴女が敵うところなんてひとつもないわ！」

「もっと土下座しなさい！」

周囲からも責め立てられ、とうとう子爵令嬢は顔を地面に擦りつけながら、しくしくと泣き出してしまった。なんて惨めな姿なのかしら。不細工って可哀想。

すっかり興が醒めてしまった私はスカートの裾をくるりと翻し、視線だけをちらりと彼女に向けた。

「これに懲りたら、二度とユリアン様には近付かないことね」

「申し訳ありません、申し訳あります……っ」

「ふん」

彼女の謝罪を鼻で一蹴すると、その場から立ち去る。あら、口止めするのを忘れてしまったわ。まあ、誰かに言いふらしたりしたらもっと酷い目に遭うって、あの足りない頭でも分かるわよね。

「アリスティーナ様を悲しませるなんて、酷い方だわ！」

「教えてくれてありがとう。サナ」

「そ、そんな！ 私は当然のことをしたまでです！」

取り巻きの一人である伯爵令嬢サナ・モラトリムが、頬を上気させながらそう口にする。

あの令嬢が私の婚約者であるユリアン様と仲良くしていたと、私に告げ口したのは彼女だ。それが嘘か真実かなんて、どうでもいい。

サナを信じるふりをして褒めてやれば、その様子を見た他の令嬢達も彼女のようになり立とうとする。誰の味方をすれば得になるかなんて、猿でも分かる簡単なことよ。由緒正しきクアトラ家の令嬢、そしてこのルヴァランシア王国の第二王子である、ユリアン・ダ・ストラティス殿下の婚約者であるこの私を、無下むげに出来る者なんていやしないのだから。

今日も学園の治安維持に貢献した私は良い気分で午後の授業へ向かったのだった。



一人で学園内の中庭を歩きながら、先程制裁を加えた令嬢の無様な姿を思い出しふんと鼻を鳴らす。ふと眼前に見知った姿を見つけ、私は意識して可愛らしい声を上げた。

「ユリアン様！」

笑顔で、たたと彼の元に駆け寄る。春の暖かな風に吹かれ、琥珀色の髪が大きく揺らめいた。

この国の第二王子である、ユリアン・ダ・ストラティス殿下。グレーの瞳は決して主張は強くないけれど、謎めいていてどこか色香を放っている。すつきりと刈られた髪にアシンメトリーの前髪。彫りの深い顔によく合う。瞳と同じグレーのそれは、光の加減で銀色にも見えた。

私の婚約者でもあるユリアン様は、無表情のままこちらを向いた。彼の表情筋が仕事をしているのを、この私ですらほとんど見たことがない。でもいいの。一国の王子たるもの、他人に簡単に気を許してはいけないもの。彼の横顔をうっとり見つめていると、無表情で首を傾げられる。

「今日もお美しいですわ、ユリアン様」

私の言葉なんて届いていないかのように、ユリアン様は視線を遠くへやった。

ああ、本当にこの世のものとは思えない。スラリと背も高く、学園の制服が誰よりも映えている。色素の薄い肌も相まって、無愛想でもこんなに美しいなんて。

ユリアン様は直系の王族の中で、現在ただ一人金髪碧眼を受け継いでいない。そのせいで王妃様は周囲から不義を疑われ、肩身の狭い思いをしたのだと、いつだったかお父様に聞いたことがある。「今日は良い風が吹いていますわね。ユリアン様のそのグレーの髪が、一層輝いて見えますわ」

せっかく髪の色を褒めてあげたのに、ユリアン様は煩わしげに眉をひそめる。かちんときたけれど、見なかったことにしてにこりと微笑んだ。

ユリアン様は学園に入学する前から、一人離宮に住んでいる。いつからそうなのか、どうしてそうなのかは、興味がないから知らない。このルヴァランシア王国は基本的に長子継承制だから、第一王子であるマッテオ・ダ・ストラティス殿下が次期国王の座につくことは、揺らがらない。完璧なこの私が国母になれないのは残念だけれど、あれやこれやと面倒を押しつけられるのも嫌だし、な

によりユリアン様のお顔の方が私の好みだから、結婚相手がマツテオ殿下でなくとも一向に構わないと思う。

ユリアン様の内面がどうであるかということにも、興味は惹かれない。ただやっぱりできることならば、この美しい顔が私だけに甘く微笑む様を、一度くらいは見てみたい。さぞや優越感に浸れることでしょうね。

「生徒会のお仕事、お疲れ様でございました。よろしければクアトラ家の馬車で一緒に帰りませんか?」

「いや、既に従者を待たせている」

淡々と口にするユリアン様に、私は内心ちっと舌打ちをする。そんなもの、放っておけばいいのに。

「でしたら明日の放課後は、テラスでお茶でも」

「生徒会の集まりがあるから遠慮しておく」

「……そうですの」

私はがっくりと肩を落としたが、ユリアン様は気にもしていないご様子。

本来ならばこの私にこんな態度、許せるはずもないけれど彼だけは昔から特別だから、笑って許してあげるわ。

ユリアン様の婚約者となり、約十年。本格的な妃教育は卒業後だけれど、私だって彼の素晴らし

い伴侶はたよりとなるべく、きちんと努力を積み重ねてきた。

恵まれた容姿はもちろん、中身も完璧でなければ。彫刻のように整ったこの方に見合う女は私だけだと、他の令嬢達に見せつけてやるのよ。いつこの泥棒猫が、隙を突いてこの方に色目を使うか、分かったものではない。その為に、知識も教養も必死に学んできた。私が、見た目だけが取り柄の馬鹿ではないということは、周知の事実だ。

「何か私にお手伝いできることがあれば、いつでもおっしゃってくださいね」

「……ああ」

そっけない返事を受け止めながらも、心の奥は不満でたまらない。

ユリアン様は、私の気持ちをもう少し理解なきるべきだわ。実の母親から冷遇され、兄であるマッテオ殿下と彼の扱いには、天と地ほどの差がある。本来ならば私のように高貴な令嬢など、妻にできる立場ではないでしょうに。もしも彼がこれだけの美貌を持っていなければ、私だって選んだりしなかった。

不義の子だと疑われ、離宮に追いやられた哀れな第二王子。それを私という存在が救って差し上げたことを、ユリアン様もきつとつか感謝する時が来るはず。

彼が私の足元にひざまず跪く姿を想像すると、つい口元がゆる緩む。そんな時不意に視線を感じて前に目を向けると、数人の生徒と目が合った。彼女達はがばつと頭を下げ、そそくさと去っていく。

「何よ、嫌な感じね」

まあ、ユリアン様に手を出さなければどうだって良いわ。

こんなつまらない学園なんてさっさと卒業して、早くユリアン様と暮らしたい。私がこの美しい人の妻であると、堂々と公言したい。

今ユリアン様の態度がそっけなかるうが、そんなことはどうだっていい。彼は基本的にどの女性に対してでもそうだし、結婚してしまえばこちらのものだと思っていた。

そう、全ては私の思い通りだったのだ。あの日あの瞬間、『彼女』が現れるまでは。



——ああ、どうしてかしら。私はどこから間違ってしまったの。

「私は、アリスティーナさんを心からお慕いしておりました」

目の前でさめざめと泣いているのは、スロフォン王国からやってきた、チャイ第四王女殿下。妖精などと褒めそやされるこの女が、憎くて堪^{たま}らない。私の婚約者であるユリアン様に色目を使い、奪おうとした。だから、少し思い知らせてあげただけなのに。気が付けば、被害者であるはずの私は衛兵によって両腕を押さえつけられていた。大勢が集まる学園のホールの中心で、まるで見せ物かのように。

目の前に立っているユリアン様は、色のない瞳で私を見下ろしている。そしてその隣には、チャ

イ王女がまるで仲睦まじい恋人のように寄り添っていた。

「……なぜ、こんな愚かな真似をした。友好国の王女に危害を加えるなど、許されることではないと、君も分かっていたはずだ」

「その女から愛する貴方を奪われぬ為ならば、手段は選ばせませんわ」
はつきりとそう答えると、ユリアン様の表情が微かに歪んだ。

「君が手に入れたかったのは、私ではない。王子の婚約者という立場だ」

「ユリアン様、違います！ 私は」

「……もうこれ以上、話すことはない」

彼はふいっと目を逸らし、チャイ王女と共に私に背を向ける。

「ストラティス殿下。どうか彼女を、酷い目に遭わせないでください。私が必ずなんとかしてみせますから」

「貴女は、慈悲深い人だ」

私を見ないユリアン様は、愛おしい視線をチャイ王女にだけ送る。彼女はわざとらしくぼろぼろと涙を零しながら、しばらく足を止めていたけれど、やがてユリアン様に促されるようにしてホールを出ていった。

ユリアン様、と何度私が名前を呼んでも、彼は二度とこちらを振り返ることはなかった。

「なぜ……なぜなの？ どうしてなのよ……っ」

もう、あの神秘的なグレーの瞳に私が映ることはないのだと、しんと静まり返ったホールが現実を突きつける。

ストラテイスの直系でありながら碧色の瞳を持たない貴方を、わざわざ選んであげたというのに。私を捨てて、可憐な妖精を選んだ最低な男。

「いつかこうなると思っていたわ。なんていい気味なのかしら」

二人が去った後のホールに、誰かの声がぼつりと響く。

「自分が一番偉いと勘違いして好き放題に振る舞って、バチが当たったのよ」

「この学園一の嫌われ者だということにも気付かないで、滑稽だよな」

「見てごらんなさい、庇う人なんて誰もいないわ」

たった一言から、私に対する不満の声が少しずつ増えていく。それはまるで湖に広がる波紋のように、一度落ちてしまえばもう止めることは出来ない。

「やめて、そんな目で見ないで！」

睨みつけながら叫んでも、ただ嘲笑されるだけ。髪を振り乱しながら反論する私に加勢する者は、誰も居なかった。

「殿下にも見限られて当然よ」

最後に放たれたその言葉に、私はびたりと動きを止める。

「そうだわ。あの方はただの一度も、私に微笑んではくださらなかった」

マリオネットの糸が切れたかのように、ゆっくりと冷たい床に体が沈んでいった。衛兵によってその場から乱暴に引きずられても、もはや抵抗する気力は残っていなかった。

それから一ヶ月後。嫌われ者の公爵令嬢、アリスティーナ・クアトラは、誰の目にも晒さらされることなくひっそりと処刑される。そう、私は死んだのだ。

——大丈夫。大丈夫ですよ。アリスティーナお嬢様。何も心配なさらないで、ゆっくり眠ってくださいね。

頭の奥深く、どこか遠い遠い場所で、そんな優しい声が聞こえる。今の私は、眠っているのかしら。じゃあ、死んでしまったのは夢だったの？ それとも、この温かい声が夢なのかしら。

ああもう、とにかく今は何も考えたくない。だってもう、怖いのも苦しいのも嫌だから。もしもこのまま目を覚まさなければ、私は解放されるのだろうか。

夢と現実の間で微睡まどろみみながら、私は無意識のうちに誰かの手をキュッと握り返したのだった。

第二章 それは幸か不幸か



「なんてことなの……私はまた、またあの恐怖を味わわなくてはならないの……嫌、そんなの絶対に嫌よ……」

ぴかぴかと輝く調度品に囲まれ、上質なベッドの上で一人毛布にくるまって、ぶつぶつと独り言を繰り返す。どん底に落ちるまでの記憶が、何度も何度も鮮明に蘇る。まるで誰かが、お伽話を読み聞かせているかのように。

どれだけ拒絶しようとも、全くの無意味。私の心は押し潰されて、おかしくなってしまうそうだった。あれほど気遣っていた身なりも、今はどうでも良い。自分が五歳の姿に戻ってしまったという現実さえ受け入れられずにいるというのに、なぜこれまでの行いまで振り返らなければならぬの。

もしもここが死後の世界ならば、確実に地獄だわ。

周囲からの侮蔑の視線や甲高い罵倒の声や、蔑むような雰囲気。家族ですら、最期の時を共に過ごしてはくれなかったという絶望感と、死の恐怖。

もしも本当に時を遡ってしまったというのならば、私は十一年後にまた、あんな運命を辿ることになってしまうのだろうか。そんな風に考えただけで、衝動的にバルコニーから飛び降りてしま

そうになる。

だから身動きすら取れないまま、目を覚ましてから何日もずっと、私はこうして震えていた。

「アリスティーナお嬢様。温かいミルクをお持ちしました。蜂蜜を溶かしているので、甘くて美味しいですよ」

ベッドの上から動こうとしない私に、リリが優しく声をかける。どれだけ無視しようと冷たくあしらおうと、彼女は何度でも根気よく私の世話を焼こうとする。私の専属侍女リリ。何歳の時だったか解雇してしまったのは、事あるごとに私の行動に口出ししてくる彼女がうつつとうしかったからだ。

「要らない」

「何かお腹に入れませんか、お体に障りますよ」

「要らないって言ってるでしょ！」

差し出されたカップを、思いきり手で叩く。乳白色の液体が、弧を描くようにしてぱしゃりと下に落ちた。

「お嬢様」

てつきり咎められると思っていた私の体は、温かな何かに包まれる。リリが私を抱き締めてくれるのだと気付くのに、しばらく時間がかった。

「大丈夫ですか？ 手にかかっていますか？」

「別に……」

「お可哀想に。よっぽど心が苦しめられているのですね」

とんとんとん、と優しいリズムで、彼女が私の背中をさする。そうされるうちに、いつの間にか手の震えが治まっていた。

「……嫌な夢を、見たの。とても怖くて、痛くて、世界が真っ暗になったわ」

「アリストイーナお嬢様……」

「私の味方は、何処にも居なかった」

自嘲気味に呟く私を見て、リリは心配そうに顔を覗き込みながら、再び優しく包み込むように私の小さな体を抱き締めた。

「大丈夫です、お嬢様にはリリがついています」

優しい言葉に、なんと答えたら良いのか分からない。結局私は黙ったまま、リリに身を委ねた。

「大丈夫。大丈夫です」

繰り返されるその言葉が、ゆっくりと私の心に染み込んでいく。ミルクを飲んでいないのに、お腹の辺りがぼかぼかと温かい気がする。

「何だか眠くなってきたわ」

「どうぞ、そのまま身を任せてください。次はきつと、素敵な夢を見られますよ」

まるで子守唄のように、リリの穏やかな声色は私を眠りの世界へと誘う。ゆっくりと目を瞑ると、

幾らもしないうちに私の意識は遠のいていった。

次の日。いつの間にか辺りはすっかり明るくなり、窓からはきらきらと陽の光が差し込んでいる。広いベッドの上で一人、真上に向かって思いきり体を伸ばした。

「おはようございます、お嬢様」

すぐにリリがやってきて、私の支度を始める。てきぱきとした手際で、あつという間に可愛らしい天使が完成した。

「子供のようではなく、本当に子供になってしまったのね」

時が経つにつれ頭がスッキリと目覚め、私は幾らか平常心を取り戻す。いえ、未だに混乱はしているのだけれど。もう、震えは止まっているみたい。

「どうやらこれは、夢ではなく現実なんだわ。とても信じられないけれど」

姿見の前に立つ私は、どこからどう見ても子供だ。ピンク色のフリルドレスに身を包み、腰の真ん中辺りまである自慢の琥珀色の髪は、細くてサラサラ。ぱっちりとした瞳にくるんとカールした長い睫毛^{まつげ}。真っ白で透明感のある肌は、触るともちもちして気持ちいい。

「私ったら、こんな小さな頃から完璧ね」

鏡の前でくるとターンしてみせる。五歳の頃のことなど覚えていなかったが、やっぱり私は昔から美しかった。

「なんて、今はそんなことを言っている場合ではないのよ、アリスティーナ」

体は幼児でありながら頭の中は十六歳という、この奇妙な現象を整理しなければ。そう思いつつ、私はもう一度だけ鏡を覗き込み、「あら、やっぱり可愛い」と、しばらく見とれていた。

巻き戻った（と仮定した）世界で目覚めてから、十日ほどが経った。

ようやく情緒が落ち着いた私は、リリと共に初めて部屋の外に出る。するとすぐに、三人の兄達が私の元に駆け寄ってきた。

全員が若いことに一瞬驚いたが、そういえば私は今五歳なのだ。兄達だってそれぞれ十一年前の姿であるに決まっている。

長男のハリー兄様が十二歳、次男のレオリオ兄様が十歳、三男のノア兄様が九歳。皆私と年が離れているせいとか、とても可愛がってくれていた。

「アリスティーナ！ やっと部屋から出られたんだな」

「怖いことがあったと聞いたが、もう辛くはないのか？ 俺達がどれだけ心配したことか」

「可愛いアリスに何かあったら、僕は生きていけないよ」

口々に心配の言葉を口にする彼らを、私は複雑な心境で見つめる。死に際はおろか私が投獄されてからというもの、誰一人として顔を見せにきてはくれなかったという事実が、記憶として鮮明に浮かんでくる。目の前の兄達の顔が、ぐにやりと歪んで見えた。

こんなに可愛がつてくれていたのに、どうして手を差し伸べてくれなかったの？ あの学園中の生徒達のように、心の中では私を嘲笑あざわらっていたの？

「……っ、はあ……っ」

途端に呼吸が浅くなり、手足が小刻みに震えはじめた。どうしたら良いのか分からなくなって、その場にしゃがみ込んでしまいそうになる。そんな私を落ち着かせてくれたのは、やっぱりリリだった。

私の手を優しく握り、包み込むような瞳でこちらを見つめる。そのおかげで、次第に息が整っていく。

今までは、曖昧あまな記憶から碌ろくでもない乳母であり侍女であったと思っていたけれど、彼女はこんなにも優しくかったのかと、この世界で改めて身に染みている。加えてリリは、私がままと落ちぶれてしまった時に側にいなかった人物。だからこそ、彼女とは話していても疑心暗鬼にならずに済んだ。

「ありがとう、お兄様達。もう平気だから、今朝けさと一緒に朝食を摂るわ」

私がそう口にするのと、三人は嬉しそうに頷く。リリの温かな右手のおかげで、今度は落ち着いて会話をすることができたのだった。

「まあ、アリストティーナ。体の具合はもう平気なの？ とても心配したのよ」

「はい、お母様」

兄達やリリと共に食堂へ降りると、母であるロベルタに声をかけられる。私は琥珀色の瞳を細めながら、可愛らしく笑ってみせた。

「アリスティーナ」

テノールの洪い声が辺りに響く。自慢の口髭ひげをちよいと触りながら、最後に父・ジョゼフが食堂に顔を出す。

「お父様」

「気分はいいのかい？」

反射的にたたつと駆け寄ると、お父様はにこやかな表情でひよいと私を抱き上げた。

「嫌だわお父様。私も子供じゃないのよ」

「はっはっは。アリスティーナは面白いことを言うなあ」

お父様は笑いながら私を椅子に座らせると、自身も食卓に着いた。全員でお祈りをした後、思い通りに食事を口にする。五歳の私って、フォークはちゃんと使えたのかしら。記憶を掘り起こそうとしても無理なので、もう諦めて普通にフォークを使いふわふわのオムレツを口に運んだ。何だか無性にミルクが飲みたいわ。温かくて、蜂蜜がたくさん入ったミルクを。

「ねえリリ、私……」

「はいお嬢様。こちらですね」

全てを言い終える前に、リリがことりと私の前にカップを置く。

「アリスは本当に、その蜂蜜入りミルクが好きだな」

目の前で湯気を燻らせるカップを見つめながら、不思議な気分を味わっていた。

前の私は、ミルクなんてお子様な飲み物は好まなかったのに。覚えていなかったけれど、五歳の頃は大好きだったのね。勝手に緩む頬をそのままに、私は両手でカップを持ちふうふうと息を吹きかけたのだった。

無事朝食を済ませた私は部屋に戻り、この状況を整理しようとカウチソファに深く腰掛ける。未だにいつか覚める夢なのではという思いも捨て切れていないけれど、その時はその時。夢だった時よりも、夢でなかった時の方が絶望は計り知れない。だってまた、あの最悪な未来を繰り返してしまふということだから。

「どちらにせよ、そうならない為に行動していった方が身の為ね」

もちもちとした自分の腕の感触を楽しみながら、私は心に誓った。まだ具体的に何をすればいいのか思いつかないけれど、取り敢えず前の人生とは違う道を歩めばいいのよね。その為に、リリは役に立ちそう。家族は当てにならないから、適当に上辺だけ繕っていればいいわよね。

リリの温かさに救われたと思ったくせに、次の瞬間には利用することを考えている。あまりにもナチュラルに悪役思考である為に、この時の私はまだ間違いに気付けなかった。

私には死ぬ間際、というよりもこれまでの人生の中で、何度も何度も繰り返してきた言葉がある。

『私は悪くない。周りが悪い』

蝶よ花よと育てられた私は、自身に悪いところがあるなんて意識すらしたことがなかった。

気に入らない女生徒を泥まみれにした時も、『私にこんな行動をさせる貴女が悪いのよ』と言っていた気がする。事実、あの時までには本当にそう思っただけ生きてきた。

けれどもしも今回も同じ思考で人生を進めていけば、断罪される未来からは逃れられないわ。私だって、自分の性格は自分が一番良く理解している。困ったことがなかったから改めようと思わなかっただけで、あんな死に方をするくらいなら私は自分を変えてみせる。そんなことは、簡単なだから。

もしかしたらこれは、愚かな私に神が与えたチャンスなのかもしれない。人生をやり直す、最初で最後のチャンス。

私、今度は絶対に『良い子』になるわ！

ソファから立ち上がった私は、フリルたっぷりのドレスをひらひらさせながら、小さな可愛らしい手を天高く突き上げたのだった。

次の日の朝、目が覚めてすぐに枕元のベルを何度も鳴らす。

「リリ、リリ！」

私が大声でリリを呼ぶと、殆ど^{ほん}経たないうちに彼女はやってきた。

「お嬢様、おはようございます。今日のお加減はいかがですか？」

体調を案じてくれる彼女は、今日もとても優しい。本当に、何故前の私はリリを解雇してしまったのかしら。

「今日も調子がいいから、朝食は食堂で摂るわ」

今更だけど、五歳児ってこんな感じでもいいのかしら。なんせ中身が十六なので、加減が難しい。もう少しちゃんと、子供らしく振る舞わないとね。

「まあ、それは良かったです」

ふわりと微笑むリリを見て、私の小さな胸の奥がキュウツと反応する。この体になってから、何だか不思議な感じがするようになった。心は十六歳のアリスティーナなのに、体が勝手に動くことがある。それはきっと、本来の五歳のアリスティーナの意識なんだろうと思う。五歳の私はリリのごが大好きなのね、全身からそのことが伝わってくるわ。

「お嬢様、本日のお召し物はいかがなさいますか？」

「リリが選んで！」

「かしこまりました」

とても広い部屋の奥のクローゼットは、洋服にドレスに靴にと、ばんばんだった。その中から彼女が選んでくれたのは、可愛らしいミントグリーンの子チュールドレス。それを見た瞬間、私は物凄く嫌な気持ちになって顔を歪めた。

「そんな色は嫌だわ。もっと女の子らしいのがいい」

「あら、そうですか？ きっとお似合いになると思いましたのに」

そう言いながら、リリは嫌な顔一つせずドレスを選び直す。彼女に選べと言ったのは私なのに、結局最後まで私はリリの選んだものにケチをつけ続けた。

だって、どれもピンと来ないんだもの。私が一回で気に入るものを選んでくれない、リリが悪いのよ。

結局自身で選んだ濃いピンクのゴテゴテしたドレスに身を包んだ私は、ナチュラルにその思考でうんうんと頷く。しかし次の瞬間、ハツとして目を見開いた。

「……なんてことなの。これがダメなんじゃない！」

そして、がっくりと膝から崩れ落ちる。染みついた根性は、簡単に拭えるものではない。十六年もの間我儘放題わがままに生きてきた私には、他人の気持ちを思いやるという感情が決定的に欠けていたのだ。

「嫌……嫌よ……どうしたら良いのお……っ」

ぺたんと床に座り込み、子供のようにわんわんと泣き叫ぶ。真ピンクのドレスに、たちまち涙の染みが広がっていった。

「アリストイーナお嬢様！ 一体どうされたのですか!？」

リリが血相を変えて、すぐに私の元に駆け寄ってくる。その表情は、心から私を心配しているよ

うに見えた。

「リリ……」

「そんなに泣いて……ああ、お可哀想に」

何の躊躇ためらいもなく、リリが私を抱き締める。途端に彼女のエプロンドレスが、私の涙と鼻水で汚れた。

「何か嫌なことがありましたか？ お嬢様」

彼女の温かい声とその体温に、ぐちゃぐちゃと絡まっていた心の中がゆっくりと解ほどけていく。私はひくひくとしゃくり上げながら、ひとつひとつ言葉を紡いだ。

「さっき私、リリに酷いことをしたわ」

「私に、ですか？」

「着るものを選んでと言ったのは私なのに、全部嫌がつてばかりで。こんなのはもう嫌なのに！ 自分ではどうすることもできないの……っ」

「アリスティーナお嬢様……」

リリが感極まったように私の名前を呼ぶ。過去の私は、こんな風に誰かの前で泣き叫んだことなんてなかった。

どうにかしたくても、どうにもできない。それがこんなにもどかしいものだと、私は生まれて初めて知った。

このままだと、再び処刑されてしまう。あの冷たい床の感触が鮮明に蘇ってきそう、小さな体が勝手に震えた。

「大丈夫です、お嬢様」

リリはゆつくりと私の背中を撫でながら、あやすように体を小さく揺らす。耳元に響く彼女の鼓動が、私の昂たかぶった感情を少しづつ落ち着かせてくれた。

「お嬢様はこんなにお優しい良い子なのですから、心配なさらなくとも大丈夫ですよ」

触れ合った所から、じんわりと温ぬくもりが広がっていく。リリの声って、こんなに耳心地が良かったかしら。

「優しくなんてないわ」

「こんな風に泣けるのは、心根がお優しいからですよ」

「全部、自分の為なの」

こんなことを言う私は、実に五歳児らしくないだろう。だけど今は、とにかく必死だった。二度と、あんな思いはしたくない。

「もしも」

リリはポケットからハンカチを取り出すと、とんとんと優しく私の涙を拭う。

「もしもお嬢様が道を間違えることがあれば、いつだってこのリリが手を引いて戻して差し上げます」

「どうして？　こんな私を煩わしいとは思わないの？」
私の質問に、彼女は目を見開いて首を左右に振った。

「そんなことは思いません。私は、アリスティーナお嬢様が大好きですから」

「リリ……」

彼女の言葉が、私の心に染み込んでいく。まるで、大好きな蜂蜜入りのミルクを飲んでる時のように、体がぼかぼかと温かくなっていく。

「絶対よ、約束だからね」

私はリリの胸に頬を押しつけ、ぐりぐりとマーキングのような行動をした。体が勝手に、リリを求めるのだ。

「あらあら、お嬢様は甘えん坊ですね」

「……そんなことないわ。私はもう大人よ」

「ふふっ」

泣き過ぎたせいでぼんやりとする視界の中、私はリリの顔をいつまでも見つめていた。



「ねえアリス、今日は何して遊ぼうか」

「ノア兄様」

和気あいあいとした朝食の時間も終わり、リリと共に自室へ戻ろうとした私の手を、ノア兄様が掴む。私より四つ歳上で、クアトラ公爵家の三男であるノア兄様は、一言で言い表せば『人たらし』だ。

まるで女の子のように可愛らしい風貌をしていて、私と同じ琥珀色の瞳でじっと見つめられれば、どんな令嬢も兄様の虜とりこになる。

昔はよく気に入らない令嬢をノア兄様に誘惑してもらい、その後でただの遊びだと種明かしをして、どん底に突き落したりしていた。

今思えば私って、本当にとんでもない女だったのよね。きっと死んでせいせいしている人達ばかりなんでしょうね。

「アリス、何だか悲しそうな顔をしてるけど、どうかしたの？」

ノア兄様が心配そうに私の顔を覗き込む。私はおぼるおぼると首を左右に振り、にこりと笑顔を作った。

「いいえ、何でもないわ。遊びましょう、お兄様。私かくれんぼがしたいわ」

「よし、じゃあ僕が鬼になるよ。ひやく数えるうちに、アリスは隠れるんだよ」
くるりと柱の方を向き、いーち、にー、と数を数え始めたお兄様を見て、私はだっと勢いよく駆け出した。なるほど。五歳の私は、かくれんぼがしたかったのね。

私は隠れる場所を探す為、お屋敷の中をどたどたと走り回る。使用人用の階段を駆け上がった先にある踊り場で、山盛りの洗濯カゴを抱えた一人のハウスメイドとぶつかる。大した衝撃ではなかったけれど、私は頬ほつぺたを盛大に膨らませた。

「もっ、申し訳ございません、アリスティーナ様！ お怪我はありませんか？」
「ちゃんと前を見なさいよ！ この私を誰だと思って……」

小さな体をいっばいに伸ばしてメイドを怒鳴りつけようとして、私ははたと動きを止めた。これよ。私のこういう所が良くないのよ。アリスティーナ、もっと広い心で物事を捉えなさい。大丈夫、以前と違って私の側にはリリという良心が居てくれるのだから。

私はしゃがみ込んで、散らばった洗濯物を集めてカゴに入れ始める。

「まあ、お嬢様！ そんなことは私が致します！」

「いいのよ、私がぶつかったのだから。それに二人でやった方がずっと早いわ」

「アリスティーナお嬢様……」

体が小さくて小回りが利くからか、私はあつという間に洗濯物を拾い終える。パツと顔を上げると、メイドはとても嬉しそうな顔をしていた。

「お嬢様はとても優しいんですね」

「えっ」

「本当に助かりました。ありがとうございます」

メイドは私に向かい深々と頭を下げると、再びカゴを持ち去っていく。その様子を、小さな私はただ口をぽかんと開けて見つめた。

優しい、ですって。

そういうえば、前の人生でそんな風に言われたことがあったかしら。綺麗だ、素敵だ、完璧だなどという称賛の言葉は飽きるほどに浴びてきた。けれど、その内面を褒められたことは一度もない気がする。

それもそうだ。ユリアン様に手を出そうとする令嬢は片っ端から苛めてきたし、あんな綺麗な人の婚約者である私は、あの学園の頂点に相応しい存在だと思っていたから。

そんなことだから、あんなに孤独な死を遂げることになってしまったのだろう。考えただけで、背筋がぞくぞくと震えた。

「……まあ、悪くない気分ね」

ありがとうと感謝され、笑顔を向けられる。私は先程のハウスメイドの表情を思い出し、ぶにぶにの頬つぺたを微かに緩めた。

「あれ、アリスティーナ？ どうして隠れもせずにはーっとしているの？」

とつくに数を数え終わっていたらしいノア兄様が、私を指差しながらことりと首を傾げている。

「ああっ、隠れるのをすっかり忘れていたわ！」

「あはは、アリスはおっちょこちよいで可愛いなあ」

お兄様は笑いながら、私の頭を撫でる。もう一回と言いたくて人差し指をピンと伸ばすと、彼は嫌な顔一つしないでもう一度壁に顔を伏せた。私はまた、たたつと駆け出す。

今度はぶつからないように、ちゃんと注意しなくっちゃ。

そうしてノア兄様と存分に遊んだ後、私達は庭園へやってきた。

パラル付きのランチテーブルの上には、様々な軽食と紅茶が用意されている。かくれんぼの途中、私がリリにお願いしておいたのだ。

今日はいいお天気だもの、外で食べるのはきつと美味しいわ。

「リリ、ありがとう」

私は彼女の元へ駆け寄り、ぎゅうつと抱き着く。リリは柔らかな笑みを浮かべながら、私の頭をよしよしと撫でた。

「アリス、珍しいな」

その時、後ろから颯爽さつそうとやってきたレオリオ兄様私とリリを見ながらそう口にする。

「礼なんて言う必要はないだろう。お前は、尊重されて当然の立場なんだから」

「レオリオ兄様」

「ほらこっちにおいで」

リリの腕の中からすると抜け出すと、私はこちらに向かって伸ばされたお兄様の腕に飛び込む。彼は私を抱き止め、琥珀色の滑らかな髪にちゅつとキスを落とす。

クアトラ公爵家次男・レオリオ兄様は、その名の通りまるで獅子のように逞たくましい人だ。私よりも五つ上だから、目の前にいる今のお兄様は十歳くらい。それでも背が高くがたいも良く、私と同じ琥珀の瞳が勇ましい美丈夫だ。

私に何かあるものならば（たとえ何もなくとも）レオリオ兄様がすぐに飛んできて、相手をぎろりと睨めつけていた。いずれ長男であるハリー兄様が爵位を継げば、次男であるレオリオ兄様は騎士になり国の為に尽力じんりょくすると、いつも豪語していた。

「アリスは可愛いな。それに、まだこんなに小さいのに美しい」

「ちょっとお兄様。私もうすぐ十七になるのだから、子供扱いは嫌よ」

むっとしてレオリオ兄様を睨みつけた直後、彼の驚いた表情を見て、しまったと思う。今の私は十六歳ではなく、まだたったの五歳なのだ。

「私ってば早く大人になりたくて、ついお姉さんぶってしまったわ」

「そうなのか。お前は、今だって十分素敵なレディだ」

お兄様は私にはこんなに甘いけれど、他の女性には至極冷たい。何かにつけては私と比べ、その度に『アリスティーナの方がずっと良い』と、私を称賛していた。

小さな頃からそうだったから、ずっとそれが当たり前だと思いき生きてきたけれど、やっぱり普通ではないのよね。

自分を変えようとするのならば、兄達のこの『アリスティーナ至上主義』に甘んじてはいけ

ないわ。私はレオリオ兄様の腕の中で、上目遣いに彼の瞳をじいっと見つめた。

クアトラ公爵家の血を引く者は代々一人の例外もなく、美しい琥珀色の瞳と髪。それはまるで呪いのように、逃れられはしない。

「どうした、アリス」

いつもと様子が違うと思ったのか、レオリオ兄様は心配そうにそっと私の頬に手を当てる。こんなにも優しいお兄様だって、私が投獄されてからはただの一度も会いにきてはくれなかった。牢の外に立っていた見張り番達が話しているのを、聞いたこともある。

——天下のアリステイーナ・クアトラは、家族にすら見捨てられた憐れな女だ、と。

こんな風に接してくれる兄様も、心の中では私のことを蔑んでいるのかもしれない。そう思うと、上手く笑顔を作れなくなる。

本質を見極めなければ。たとえ最低な人達でも、家族は家族。ここで敵視しても、きっと良い方向には向かないだろう。

「……なんでもないわ、お兄様。さあ早く昼食を摂りましょう」

ふいつと視線を逸らすと、私は出来るだけ子供らしい仕草でするっとお兄様の腕から抜け出した。



「アリストイーナ。今日は王家の別邸に招待されているんだ。お前も一緒に行かないか」

ある日の午後。四階の子供部屋でノア兄様と人形遊びをしていた私に、お父様が声を掛けた。

王家の別邸といえば、確か王都から馬車でさほど遠くない気候の良い土地にある、カントリーハウスの一つ。広大な敷地内では乗馬や狩猟も楽しめ、とても素敵なローズガーデンもある。私もそこで、何度もアフタヌーンティーを楽しんだ。

クアトラ家も幾つもカントリーハウスを所有しているけれど、やっぱり王家は別格だと言わざるを得ない。

絶対王政であるこの国では、ストラティスの血筋よりも尊いものなんてないのよね。もつとも私からすれば、あまり興味はないのだけれど。

ユリアン様との婚約を受け入れたのも、彼があまりにも美しかったから。あんなに綺麗な人を、見たことがなかったから。だって権力目当てなら、わざわざ冷遇されている第二王子なんて選ばないもの。

「あそこはとってもいい所よね」

「何だって？ お前に行ったことがないだろう」

「まあ！」

いやだわ、私ったら。ちゃんと五歳児らしく振る舞おうとしているのに、どうしても十六歳の心が顔を出してしまう。だけど仕方ないわよ。だって人は、そう簡単には変わらないのだから。

「そんなことないわ！ 私は変わるのよ！」

頭の中の私を、大声で怒鳴りつける。もう絶対にあんな思いは嫌だ。今だって夜中に何度も悪夢にうなされては、泣きながら目覚めている。

その度にリリがすぐにやってきて、私を優しく抱きしめるのだ。おかげで私は、何とか穏やかに生活が出来ている。彼女が居なければきっと私は部屋の隅で毛布を被り、いつか来る未来に怯えながら過ごしていただろう。改めて、リリに感謝しなければ。

「一体どうしたんだ、さっきから訳の分からないことばかり。どこか調子が悪いのか？」

百面相を練り広げる私を抱き上げ、お父様が困ったように眉根を寄せた。

「今すぐ医者に診てもらうか。それとも空気の綺麗な場所で療養を」

「大丈夫よお父様！ 何ともないわ！」

自分でも、今の私は不気味だろうと思う。でも仕方ないのよ。同じ体に、五歳の私と十六歳の私が暮らしているのだから。こんなこと言ったら、どこかで頭を打って変になったと思われるので、誰にも話せはしないけれど。

「本当か？ 我慢しているんじゃないのか？」

「我慢なんてしてないわ。私はとっても元気よ」

「しかし……」

お父様がなかなか納得しないので、私はここで最終手段に打って出た。

「大好きよ、お父様」

抱き上げられたまま彼の首元に抱き着き、その頬にチュツとキスをする。微かに口髭が当たってくすぐったいけれど、我慢しなければ。

「ああ、アリストティーナ。お前はなんて可愛い子なんだ。まるで純白の天使だ」

「お医者様を呼んだりしないでね、お父様」

「もちろんだ、お前の嫌がることはしないよ」

すりすりされると、余計にくすぐりたい。私はきゃつきゃと喜ぶフリをして、やんわりとお父様から顔を離した。

さて、話は戻ったわ。私は今から、王家の別邸へ行かなければならないのね。頭を切り替えた私の中に、過去の記憶が蘇ってくる。そういえば、私がユリアン様に初めてお会いしたのがこのくらいの年齢で、場所はあのカントリーハウスだった気がする。

この私に優しくないとすることに、初めは衝撃を受けた。だから益々ムキになったのよね。絶対に彼の妻になって、虜にさせてやるって。

それに前の私は、ユリアン様を一種のアクセサリーくらいにしか思っていなかった。だって何年経っても、ちっとも優しくしてくださらないんですもの。猫を被ってしおらしくしてみたところで、あの無表情はビクリとも動かない。

人のことは言えないけれど、ユリアン様だって見た目を除けば大した魅力はなかった。いわゆる、

お互い様ってやつね。

色々と考えた結果、私はお父様についていくことを決めた。バッドエンド回避の為には、ユリア様とは関わらない方が良いのかもしれないけれど。今会わなかったからと言って、クアトラ家の立场上永遠に会わなくて済むかといえはそれは難しそうだ。

だったら、お互いが小さな内にユリア様と出会っておいた方がいいと私は考えたのだ。

私さえ傲慢でなくなれば、きっとあの未来は回避できるはず。チャイ王女に手出ししなければいだけの話なのだから。

私の人生を台無しにした、猫被りならぬ妖精被りの良い子ぶりっこ。彼女に手を出してしまえば全ては終わる。そう、あの日のように。

私はお父様の膝の上に座り、ゆっくりと目を閉じる。チャイ・スロフォンが初めて学園にやってきてから、まんまと私の居場所を奪ったその瞬間までが、走馬灯のように鮮明に浮かび上がった。



「ようこそ、チャイ王女。ルヴァランチア王立学園へ。生徒そして教師一同、貴女様のご入学を心より歓迎致します」

美女大国と言われる隣国のスロフォン王国第四王女。四姉妹の中でも特に妖精のようだと、この

国でもよく噂されていた。

スロフォンと我が国は、はるか昔から友好関係にある。入学にしては時期が少々ずれているが、王女の転入は両国の友好の証あかしとでも言いたいのだろう。もしくは、チャイ王女の本格的な『婿探し』といったところか。どちらにせよ、私にとって非常に面白くない事態であることは確か。

「こんなに歓迎して頂いて、とても嬉しいですわ。ですが特別扱いをされると困ってしまいます。私は、こちらで学ばせていただく身なのでですから」

チャイ王女は噂通り、まるで花の妖精のようだった。

肩までのプラチナブロンドの髪はふわふわとして、歩くたびに可愛らしく揺れる。くりくりとした大きな瞳を縁取る睫毛は、彼女が瞬きをするたびに音を立てそうなほどに濃く、長い。真っ白な頬は緊張からかほんのりと赤く染まり、華奢きゃしゃな手脚は絶えずパタパタと動いていた。

その様子を尻目に、私は滅茶苦茶に罵倒してやりたくなる衝動を堪えながら、深呼吸を繰り返す。この世で私が、最も嫌悪する人種。庇護欲を駆り立てる、いかにも可憐で可愛らしい女。自身の力では何も出来ず、他者に頼って生きているような人間には、本当に反吐へどが出る。

「皆さんと一緒に過ごすこれからの日々が、とても楽しみです」

チャイ王女はそう言うのと、にこりと微笑む。その瞬間その場にいた私以外の誰もが、彼女の虜もとなったのだった。

チャイ王女がこの学園にやってきてから二ヶ月が経つ頃には、私の苛立ちは限界を越えつつあった。

監視と利用の為に、私は自ら王女の案内役を買って出た。学園の施設を案内したり、どんなカリキュラムに取り組んでいるかなどを説明する役割。

とりあえずチャイ王女に下手に手は出さず、様子を窺っていた。どうせ取り繕っていたって腹の中は真っ黒だろうから、弱みの一つくらい握っておけば、これから先の保険にもなると思って。

妖精だのなんだのと褒めそやされたところで、所詮は欲まみれ。王位継承権を持たない第四王女なんて、打算ばかりに決まってる。その尻尾を、このアリスティーナが掴んでやるんだから。

そう思っていた私の目論見は、まんまと外れることとなった。

「アリスティーナさん、いつも本当にありがとうございます。これはほんの気持ちです、どうか受け取ってください」

チャイ王女がにこにこしながら、私に布袋を手渡す。中身を見ると、それは金色の細工箱に入っておしろいだった。

「これは、スロフォンでしか取れない貴重な花の胚乳部分を使ったものです。我が国でも王族や一部の貴族しか使用できないような、特別なおしろいなんですよ」

「……まあ、それは嬉しいですわ」

「だけど、アリスティーナさんはそのままです十分お美しい方ですものね」

それは嫌味なのかしら。そんな無垢むくな顔をして、内心では私のことを見下しているくせに。

「お氣遣いありがとうございます、チャイ王女殿下」

にこやかに微笑みながら、内心ちつと舌を打つ。この女の偽善者ぶつた振る舞いも癩しやくに障るけれど、なかでも私が一番気に入らない理由は、他にあった。

と、彼女が目線を上げ嬉しそうに笑う。

「まあ、ストラテイス殿下」

向こうからやって来たのは、私の婚約者であるユリアン様。彼は私のものなのに、どうしてか視線はチャイ王女の方にある。私が一人である時は一度だつてこんな風に、ユリアン様の方から近づいていらつしやつたことなんてなかつたのに。

悔しさにぎりりと奥歯を噛み締めたその拍子に、手に握られた布袋が形を歪めた。

「チャイ王女。この学園での生活には慣れましたか？」

「はい、アリスティーナさんのおかげです。本当に親切な方だわ」

「母国から離れ、心細いこともあるでしょう。なにかあれば、私を頼ってください」

私を除け者にしたかのような穏やかな空気が気に入らず、ずいっとチャイ王女の前に出る。

「ユリアン様。今週末のことはお忘れになっていらつしやいませんか？ クアトラ家一同、ユリアン様のご来訪を心よりお待ち申し上げますわ」

「……ああ」

ユリアン様は、こんなにも分かりやすい方だったかしら。余計なことを言うなど、そのグレーの瞳の奥が物語っている。

「チャイ王女には『良い仲の男性』はいらっしゃいませんか？ 私にとってのユリアン様のよう
な」

「アリスティーナ、よさないか」

チャイ王女は余裕の笑みで、にこりと私に微笑んでみせる。

「残念ながら、私にはまだそのような素敵な話はないのです。仲睦まじいお二人が羨ましいです
わ」

「まあ。何だか恥ずかしい」

私はポツと頬を赤く染めてみせるが、対照的にユリアン様の表情はグッと硬くなる。

「私にもいつか、ストラティス殿下のように素敵な方が現れるといいのですけれど」

「チャイ王女のような女性なら、心配無用でしょう」

「ふふっ、社交辞令でも嬉しいです」

……何なの、どうしてなの。私というものがあながら、どうしてユリアン様はそんな顔をなさ
るの。

「では、失礼します」

ユリアン様は一礼の後、従者と共に去っていく。

「殿下は本当に素敵な方ですね。アリスティーナさんと並んでいると、とても絵になります」

「……ありがとうございます」

「私も、心から慕う方との幸せな未来があれば良かったのですけれど」

それは一体、どういう意味なのかしら。まさか、私が居るからユリアン様とは一緒になれないと、そう言いたいのか？

「チャイ王女。そろそろ中へ戻りましょうか」

「ええ、そうですね」

にこりと微笑むその笑顔は、憎らしいほどに愛らしい。そう思ってしまう自分も嫌で、私も完璧な表情を作り微笑んでみせる。

「……ふん。何よ、こんなもの」

王女が前を向いている隙に、私は先程貰ったおしろいを布袋ごとゴミ箱に放り込んだ。それを誰かが遠目に見ている、あまつさえ拾い上げていたなんて、夢にも思わずに。

「アリスティーナ」

それから数日後の中庭で、ユリアン様が私の名前を呼ぶ。側にいるサナに視線で合図を送ると、私の周囲にいた令嬢達が一礼の後そそくさとその場を後にした。

「まあ、ユリアン様。一体どうなされたのですか？」

彼の方から私に話しかけてくるなんて、滅多めったにないことだ。滲み出る自信を隠すことなく、私はにこりと微笑む。

もしかすると、チャイ王女に親切にしてあげている心優しい令嬢だと、そう言いたいのかもしれない。ユリアン様は感情表現が苦手な方だから、私がちゃんと察して差し上げなければ。

「生徒会室の前に設置してある意見箱の中に、君への苦情が多く寄せられている」

「……は？」

「わづら 劳いの言葉を待っていた私は、聞き違いでもしてしまったのかと、困惑の表情でユリアン様を見つめた。

「そういった意見は、今までもあった。けれど最近は、目に余る」

「ち、ちよつと待つてください。私は」

「行動には気を付けた方が良く、君の側にチャイ王女が居る時は、特に」

それは一体、どういう意味なの？ まさか私と王女を比べて、あんな風になれと言っているの？ 怒りを通り越して、言葉も出ない。体がふるふると震えて、顔に熱が集まる。

「それが君の為になる」

「ユリアン様が、そうおっしゃるのなら」

喉から声を絞り出し、心にもない台詞せりふを吐いた。ユリアン様は短い溜息を一つ吐き出すと、もう用はないとも言いたげに、私を置いてさっさと行ってしまった。

「……何なのよ、一体」

あり得ない、あり得ない、こんなこと絶対にあり得ない……！ ユリアン様の、この国の第二王子の妻となるのは、この私でなければならぬ。そう、決まっているのだから。

チャイ王女の毒牙にかけられようとしている彼の目を、私が覚まさせる。それが、婚約者としての務めなのよ。見る目のない、なんて可哀想な人。天使のような笑顔に騙だまされて、その裏に隠された悪魔に気付きもしないなんて。

そうよ。私は何も、間違っていない。あの方の隣で笑うのは、この私でなくてはならないのよ。

「見てほら……」

「本当だわ。相変わらずね」

くすくすと、どこかで嘲笑が聞こえた気がする。文句を言おうと辺りを見回しても、その位置が分からない。……何だか、あちこちで笑われているような気がするのはどうしてかしら。

『チャイ王女とは、大違いだ』誰も彼もが、私のことをそんなふうに見ているのではと、疑心暗鬼に囚われる。

これも全部、あの女が現れたせいよ。

「あら？ ポケットに何かあるわ」

違和感を感じて探ると、あるはずのないものがそこから出てきた。

「これは……」

確かにゴミ箱に捨てたはずの、チャイ王女から贈られたおしろい。それがどうして、手元に戻って来たのか。こんな陰湿なことをするのは、きつとあの女以外には居ない。私は常に彼女の側に居るから、捨てた場面を見られてポケットに入れられたに違いない。

何て嫌味なのかしら。直接非難せずに、恐怖を煽るようなやり方を選ぶなんて。やっぱり、妖精なんかじゃないわ。

「あの女に、ユリアン様は絶対に渡さない」

とつくの昔に見えなくなったユリアン様の去った方向をぼんやりと見つめながら、私の中の何かのパチンと音を立てて切れた。

そうしてある日、私は遂に禁忌を犯す。小さな嫌がらせだけでは満足できず、チャイ王女を階段の上から突き落としたのだ。残念なことに、彼女は護衛に受け止められて無事だった。誰も居ない瞬間を狙ったつもりだったけれど、この時の私は嫉妬のあまり、正常な判断が出来なくなっていたらしい。現行犯ですぐに衛兵に捕らえられ、目撃者も一人や二人ではなかった。

ユリアン様を含め、教師生徒関係なくすぐに大勢の野次馬が駆けつけ、私を取り囲む。その中には常に私に纏わりついてきたサナも居たけれど、目が合った瞬間に逸らされた。

「……私は、何も悪くない」

ぼつりと呟いた瞬間、捕らえられた私を無表情で見下ろしていたユリアン様の眉間に、深いシワ